

ボランティア魂 第3回

子どもに近い気持ちで



▲子どもたちが描いた絵



越喜来みんなの
なかよし広場を企画した
わいちりょう
片山 和一良 さん
(大船渡市)

●アイデア遊具がいつばい

津波で大きな被害を受けた大船渡市三陸町の越喜来(おきらい)地区で、昨年7月に手づくりの児童遊園が完成した。ガレキ撤去作業の中から生まれた遊具を使った、ユニークな公園だ。「みんなのなかよし広場」と名付けられた公園には、廃タイヤのブランコ、架設足場のジャングルジム、廃材を組み立てた滑り台、屋根付きのベンチ、ミニサッカーゴール、土管を使った地下通路などが並ぶ。公園の整備を始めたのは、地元で建設業を営む片山和一良さんだ。公園作りには、越喜来の小学生や東京芸術大学の学生ボランティアも作業に加わった。敷地は、津波で被災した地域の方が無償で貸してくれた土地だという。

●越喜来の未来予想図

この公園が生まれるきっかけとなったのは、片山さんが越喜来小の子どもたちに「未来絵図」を描いてもらったことだ。「被災して電気も来ないときに、火を焚きながら、これから、ここをどうするかと避難所で話し合っただけです。」そのと

き、子どもたちに「越喜来の未来予想図」を描いてもらい、地域の復興に参加してもらおうことを計画した。

●子どもたちの絵が届く

その頃はまだ学校が再開しておらず、小学校では被災したばかりでそれぞれでないという返事だった。ところが、小学校も再開して、震災から1か月もたない頃に、先生が宿題として子どもたちに絵を描かせてくれた。越喜来小学校の協力が得られて、40名を超える子どもたちがそれぞれの思いを絵にした。完成した絵には、ドーム屋根付きのサッカー場など、将来の夢が描かれていた。被災前の校舎や近所の店の絵もあった。子どもたちがこの地域に愛着を持っていることがうかがわれた。

●未来都市の絵ではなかった

「将来の越喜来」というテーマだった。「宇宙船の絵とかSFの世界の発想になっているだろうと思っていたのですが、そういう絵なんかひとつもありませんでした。」片山さんは驚いた。「山並みにしろ、線路にしろ、店屋さんにしろ、元々あった風景が多かったです。津波で流される前の越喜来の姿が。だから、ああそうか、未来の越喜来というのは、そういうことなのかと思いました。子どもたちにとつての復興というのは、被災前に戻すことだ。」

●全壊したスタンドに展示

子どもたちの絵が届いたものの、津波で公共施設や店舗が被災し、絵を展示できる場所がなかった。そこで、かろうじて屋根だけが残っていたガソリンスタンドに、これらの絵を展示することを片山さんは思いついた。給油スタンド跡地の撤去が決まった時、掲示板の大パネルに

子どもたちがペンキでさらに絵を描き足した。

●気持ちまでは流されない

子どもたちに未来の越喜来の絵を描くことを提案した片山さんには、強い思いがあった。片山さん自身も事務所を流されたが、津波で気持ちまで流されてはいけないと思っていた。そして、子どもには自発的に手足を使って動いてもらいたいという願いがあった。「遊具を作るときも、子どもに釘打ちなんかをさせると自分で手を打ったりして『痛い痛い』って来るわけですよ。俺はただ舐めて終わら。子どもにはいろいろな体験をしてもらいたかったです。」遊具は、子どもたちが自由に色を塗ったりして仕上げた。

●「なかよし広場」

「私自身がしたいことを、子どもたちに手伝ってもらったんです。被災した子どもたちが元気に遊び回る場所を作ろうという一心でした。」と片山さんは思い出を語る。「たとえば滑り台でもなんでもね、できあがった物を持ってきてあげたって、それはそれで楽しいかもしれないけれど、やっぱり思いが、広場に対する思いが違うでしょう。」広場の名前も子どもたちがみんな考えてくれた。

●遊んでいたら子どもたちがハマった

どうしてこんなにがんばられたのかと聞くと、「別に、俺が子どもたちのためにやっていると感覚はないのさ。」と答える片山さんは実に自然体だ。「実のところは、子どもたちが俺の意見に賛同して、俺が子どもたちと一緒に遊ぶという感覚なの。」片山さんは照れ笑いをする。「だからたぶん、普通の大人よりは子どもに近い気持ちとか視線を持ってると、子どもが遊んでたら、子どもが